山陽新聞社長賞（小学校・最優秀賞） 高学年

新聞感想文の部

4年後の僕は

倉敷市・玉島小6年　細見　健人

見出しを見て思った。僕もそうだと思った。「〝特攻〟という死ににいく行為のどこが美しいのか」と。戦争というものを、知らない僕もはっきりと理解することができた。

元特攻隊員の桑原敬一さんは、16歳で海軍飛行予科練習生になり、19歳で出撃した。もしも、僕が戦争時代にうまれていたら、4年後には練習生になり、7年後には出撃していたかもしれない。―4年後には、死ににいくための訓練をしている―。とても受けとめることはできない未来だ。毎日平和に過ごし、めぐまれた生活をおくっている僕は、恐ろしくて、想像するだけで体がふるえた。きっと桑原さんも心の中では、そんな気持ちがあっただろう。しかし、その命令を断ることなんてできない。当時、軍は巨大な力を持っていたからだ。誰でも逆らうことはできなかっただろう。「戦争は弱い者が犠牲になる」。桑原さんが言っていた。強い者は大きな〝力〟で、弱い者をおさえこみ自分のすきなようにあつかう。軍の偉い人は、まさに生殺与奪だったのだろう。自分の指示で何人の人の命がゆらぐのか。そのことを分かっていたのだろうか。偉い人への不満はいくらでも出てくる。でも、それをおさえこまなければならない。その感情を表に出してしまうと、ひどい罰にあってしまうからだ。生きるためには、本当の気持ちをかくさなければならなかった。苦しい3年間だったと思う。しかし、まだまだましだったのかもしれないとも思った。その3年間は「生きる」ことができていたからだ。訓練のあとには、戦闘がまっている。それも「特攻」という戦闘なのだ。

桑原さんは、どんな気持ちで出撃したのだろうか。母のことをどれだけ心配したのだろうか。僕には、理解することができないほど複雑な気持ちだったと思う。出撃する日まで、多くの同期生が自分の目の前で出撃していった。人の死が「生きたい」という願いとからみあって、なんとも言えない複雑な気持ちになったんだと思った。この気持ちで艦上攻撃機にのりこみ、エンジンの異常で不時着したときはどんなことを思ったのだろうか。僕だったら少し安心するのかもしれない。また、出撃することが分かっていたとしても自分の命は少しだけでものびたからだ。〝死〟ととなり合わせの生活で「生きたい」という思いはとても強かったと思う。「国のために」と言って自分の命を犠牲にする覚悟があったとしても、どこかに「生きたい」と思う気持ちはあったはずだ。死におびえ、恐ろしさを覚えるといった〝自然な気持ち〟は簡単にはかえられない。

戦争は、多くの〝弱い者〟が犠牲となる。人を洗脳し、〝死〟を美化しようとする。そんなことをくり返してはいけない。これからは、ぼくたちが社会をつくっていく番だ。今回感じることのできた「戦争のおろかさ」を忘れずに生きていきたい。「本当の平和」をつくっていきたい。

特攻は美しいものではない

元隊員・桑原さん　志願でなく弱者への強制

戦争体験を語る元特攻隊員の桑原敬一さん＝11日、神奈川県大和市

1945年5月31日、特攻出撃前日の桑原敬一さん（本人提供）

「特攻は美しいものではない」。太平洋戦争中、飛行機で2度出撃し、機体故障で帰還した元特攻隊員桑原敬一さん（88）＝横浜市南谷区＝は「私たちにとっては志願ではなく事実上の強制だった。弱い者が犠牲になる戦争を二度と起こしてはいけない」と訴えている。15日は終戦から69年。（1面関連）

◇

桑原さんは東京で生まれ、岩手県北上市で育った。生活に困窮し、旧制中学への進学は断念。1942年、16歳で海軍飛行予科練習生になった。

45年2月、兵庫・姫路海軍航空隊で白い紙片と封筒を渡され「特攻隊への参加を希望するかどうか書け」と言われた。拒否したかったが「命令のまま」と書いて提出。指名されたのは、その2日後だった。

「死ななければいけないんだ」。巨大な力で押しつぶされるような感覚に襲われた。父は前年に病死。母のことが心配だったが、弱音は吐けなかった。

神経戦が激化した4月、鹿児島・串良基地へ。先に出撃が決まり、鹿屋基地になった同期生から「まだ死にたくない。代わってくれ」と迫られた。何も言えなかった。同期生はこわばった笑みを浮かべて飛び立ち、戻らなかった。

桑原さんにもその時がやってくる。5月31日、整備の出撃が決定。特攻に行く予定のない仲間から「敵艦と激烈なキスだな」「ガンとやれよ」と元気づけられた。800キロ爆弾を積んだ艦上攻撃機に3人で乗り込み、沖縄周辺の米艦に突っ込むため離陸。涙がぼろぼろこぼれた。

ところが、エンジンから「パスン、パスン」と異常音が聞こえ、黒い煙が出始めた。近くの種子島の飛行場に爆弾を抱えたまま不時着。身を隠せて串良基地に戻ると、上官から厳しく叱られた。

1週間後、2度目の出撃。飛行中に雨が降れ、操縦席を覆う風防が真っ黒になった。再び種子島に着陸した。使える飛行機がなくなり、翌日、解散命令が出た。

その後、任務でまいた台湾で終戦を迎え、これで生きて帰れる」とほっとした。息子と対面した母は泣いて喜んだ。

「上官は出撃せず、上官に目をかけられている人間は指名されなかった。戦争では弱者が弱者を犠牲にすることを実感した」

元隊員の体験談には特攻を美化したような表現が多いと感じ、84年に「串良　ある特攻隊員の回想」を出版し、自分が直面した苦悩や葛藤を赤裸々につづった。「回想」と非難されたが、桑原さんは「こう反論する。

「勇ましい雰囲気で陶酔することは簡単だ。だが、戦争はそんなもんじゃない」

2014年8月16日付　山陽新聞

寸　評

元特攻隊員のインタビュー記事をもとに、戦争の犠牲になった人たちに思いをはせ、平和の大切さを訴えています。構成をよく考えて感想を書き、読み応えのある文章となっています。

2015年2月21日 山陽新聞朝刊 104ページ　(C)山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。